

2014年2月23日 礼拝メッセージ

聖書：詩篇16篇1～11節

説教：あなたこそ、私の主

1 神よ。私をお守りください。

この詩篇を書いたダビデは若いとき、巨人ゴリアテをたった一つの石で倒しました。それがきっかけとなり、当時の王様であったサウルの部下として召し抱えられていきます。戦いにかけては右に出る者はなく、顔はハンサム、楽器を演奏させればプロ並みの腕。そんなダビデを人々が放っておくわけはありません。今ならトップスターです。サウルがおもしろいはずはありません。ダビデを激しくねたみ、殺そうと執拗に後を追いかけます。そのことでダビデは友人から裏切られ、密告され、死の危険を何度も経験しました。そのたびに「神よ。私をお守りください」と祈ったのだらうと思います。

日本では、ありがたい神さまだというのなら、どんな神であるか気にせず、道ばたに転がっている石ころにでも手を合わせます。普段は、「神など信じない」と言い放っている人でも、困ったことが起きれば「神さま。助けてください」と言います。ダビデも、そうだったのでしょか。

2 私はいつも、私の前に主を置いた。

8節にこうあります。「私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。」ダビデは、困ったときだけ思い出したのではなく、いつも主のことを意識していたと言っています。「そうか、ダビデはすばらしい信仰者だった。」そんな結論を出したくなりますが、もう少し深く掘り下げてみたいと思います。私の前に主

を置くとはどういうことなのか。具体的には何をしていたのか。そこを知りたいと思います。

ヒントはまさにこの8節にあります。よく考えるとちょっと理屈に合わない表現です。私の前に主を置いたのに、主は自分の右におられる。まともに考えたらちょっとおかしいと感じませんか。

こう考えたらどうでしょうか。まったく違う話をするようですが、なにかを決めるには必ず判断の基準が必要だということは、誰もがうなずくと思います。身近な例で言えば、スーパーで野菜を買うときにどれを選ぶか、いろいろ考えるでしょう。割安感があるか。新鮮か。傷がないか。いろいろな基準を当てはめます。

では人間の生き方はどうか。野菜を買うのとはかなり違います。ひとそれぞれです。裕福な生活をするためには少々危ない橋を渡ってもかまわないと考える人もいれば、たとえ飢えて死のうとも間違ったことはしていけないと考える人もいます。十人いれば、十人の生きる基準がそれぞれにあると言ってもよいくらいです。

私は若いとき、人間が生きるための本当の基準、変わらない永遠の基準のようなものがあるのではないかと考えていました。そのことをずっと捜しましたが、わかりませんでした。そのうちに、日々の生活に追われるようになり、そんなことはどうでもよくなりました。少々、心にやましいことをしても、ばれなければいいじゃないか。どうせ、みんな同

じことをしているのだと開き直るようになりました。

けれどもあるとき、聖書に出会い、自分のしてきたことが罪であると教えられました。それは厳しいことでした。でも、いっぼうでは自分がずっと探し求めていたことがみな聖書に書かれていることを知ったときは驚きました。おそらく皆さんも同じ経験をされたことでしょう。

暗い道を歩こうとしても、灯火がなければ前に進むことができません。灯火が人生の基準になります。灯火はどこにおきますか。後ろに置いても用をなしません。必ず前に置かなければなりません。主が私たちの歩むときの灯火となってくださいましたから、「私の前に主を置いた」という意味になります。

主のみことばを思い起こしながら、どちらに進むべきかを考えます。すぐに判断がつかないときもあります。確信がなく、迷うこともたびたびです。主がはっきりと教えてくれたらどんなに楽だろうと、多くの方が言います。主は遠くに離れていて、何も言ってくれないように感じます。ところがダビデは「私の右におられる」と言います。聖書の世界では「右の手」は最も優れた場所のことを指します。主は、私たちのすぐ隣にいて、なにがあってもすぐに相談に乗ってくださいと言うのです。これで、「私の前に主を置いた」と「主が私の右におられる」の区別がわかったと思います。

では次に考えます。主をいったいいつ相談に乗ってくださいなのでしょう。

3 助言を下さった主

一つ前後しますが、7節を読みます。「私は助言を下さった主をほめたたえる。まこと

に、夜になると、私の心が私に教える。」

「主が助言してくださる」というのは理解できるのですが、後半の「まことに、夜になると、私の心が私に教える」は、なんのこともやらすぐには理解できないかもしれません。鍵は「夜」ということばにあります。

何か大きな心配事や、気がかりなことに直面したときのことを思い出してください。昼間は忙しくしていますから、心配事をとりあえず脇に置いています。夜になります。布団に入って休もうとします。昼間忘れていた、心配なことが頭に浮かんできます。目が冴えて寝付けなくなります。皆さんも経験があるでしょう。その時何をしていたのでしょうか。おそらく二つあります。

一つ目。このむずかしい問題を乗り越えるために、何をすればよいのか。どんな知恵があるのか。どんな計画が可能か。あらゆるパターンを考え、自分の力で答えを出そうとしていました。それが一つ目です。

そして二つ目。どうしてこんな問題が起きたのか。この問題の責任は誰にあるのか。犯人捜しを始めます。どう考えてもあの人が悪い。そう思うと、だんだん腹が立ってきます。あの子のせいで、自分がこんな苦しい目に遭わなければならないのかと思うと、ますます怒りの火が燃えさかります。

逆のパターンもあります。こうなったのは自分の不注意からだ、それでみんなに大変な迷惑をかけてしまった、と自分を責め、落ち込み、涙を流すこともあります。

そんな私に、主はいつ助言して下さるのでしょうか。昼間ですか。ダビデは言いました。「まことに、夜になると、私の心が私に教える。」布団の中で、眠られない夜を過ごしているとき、そのとき主の助言があったと告白

しました。夜眠られず布団の中で右を向いたり左を向いたりしているとき、主から確かなお告げのようなものが聞こえてくるというのでしょうか。ダビデにはそのような特殊な能力があったというのでしょうか。

そういうことはありません。昼間、信仰深く振る舞っているつもりでも、夜になるとどうなりましたか。先ほど言ったとおりです。心の中で二つのことを繰り返しているのです。自分で何とか問題を解決しようとあせっていました。どこにも主を信頼する態度はありません。

この問題の責任はあの人にあると言って、怒りと憎しみをぶつけていました。心の中で「あんな奴は死んだほうがましだ」と叫んでいました。隠されていた罪が明らかになったのは夜でした。

いいのでしょうか。これが主の助言です。皆さんはこう思っていないでしたか。神さまのアドバイスというのは、「あなたはこちらの道を選びなさい。そうすればあなたは豊かに祝福を受けます」、そんな声がどこからか聞こえてくる。聞こえないにしても、心の中に確信が与えられること。それが神のアドバイスだ。もちろん、そういうこともあります。けれどもそうでないケースもあります。私たちの心の内にある罪があらわにされること。それが、主の助言である。そう言えるのです。

4 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。

意外でしょうか。どうしてこれが主の助言なのでしょう。主とはどのような方なのでしょうか。

目の前にある問題を解決して下さる。それが主なのでしょう。そうであれば、この

世の神々と何が違うのでしょうか。主は、もちろん目の前の問題を解決して下さる方ですが、その解決の仕方がこの世の神々とまったく違います。

どんな理由であれ、人を憎み、人に怒りをぶつけることを、主はよしとはされません。主の祈りで祈ったとおりです。「私たちも私たちの負い目のある人たちを赦しました。」人を赦せるのかどうか。神はそのことを問いかけてます。人の生きる基準として、そのことが軽く扱われることは絶対にありません。人を憎んでいる限り、赦しは与えられません。頭ではそのことを知っています。けれどもどうしても赦すことができない。それが私たちです。人を赦すことができないのであれば、さばきを免れません。どうしたらよいのでしょうか。こう祈るしかありません。「主よ。私は貧しい者に過ぎません。主よ。こんな私をあわれんでください。」

この祈りを主はどのように聞かれるのでしょうか。赦せない思いで苦しみ、最期は墓に葬られ、朽ち果てるしかない私たちにこう約束されます。「まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。」

いのちの道がここに 있습니다。でも本当でしょうか。本当にこの神さまを信じてよいのでしょうか。主が身をもって教えてくださいます。この方は罪ある者として死なれました。けれどもこの方は墓からよみがえられました。なぜだと思いますか。イエスが神だから、ではありません。最期まで父なる神を信じ続けたからです。その信仰に応えるように、父なる神は人となられたイエスをよみがえらせてくださったのです。私たちも同じです。

主が歩まれたその後を一步一步たどっていきます。

今日午後から 2014 年度予算総会が開かれます。これからの一年、どのように歩んでいくのでしょうか。目に見える何かを追いたいとは思いません。そのようなものはむなしく消え去るだけです。私たちはむしろ、目には見えないけれども、私の右におられ、助言をしてくださる方に、「あなたこそ、私の主である」と告白をしていく。そのような群れでありたいと願っております。